

307. 堂ノ北原遺跡出土の 玉生産資料

1. はじめに

堂ノ北原遺跡は、守山市吉身三丁目に位置し平成8年、吉身小学校の西側で実施した確認調査から奈良時代の遺構、遺物を検出したことにより発見された遺跡である。その後、学校の東側において行った2回の調査により、溝やピット、自然流路を検出したことなどから、遺跡は吉身小学校を中心とする範囲に広がっていると思われ、古墳時代～鎌倉時代の集落跡と周知するようになった。

今回報告する調査は平成13(2001)年度に行った第4次にあたり、吉身小学校の南側の場所で、宅地造成工事に伴う宅地内道路部分を範囲として実施したものである。

遺構は古墳時代の竪穴住居跡、平安時代から鎌倉時代と考えられる掘立柱建物跡や土坑、多数のピットを検出した。このうち竪穴住居(SH-1)から、玉作りに供した石材や工具、製品や未製品が出土し、生産に関わる建物遺構として注目でき、出土した石材を中心に観察し、検討を加えてみる。

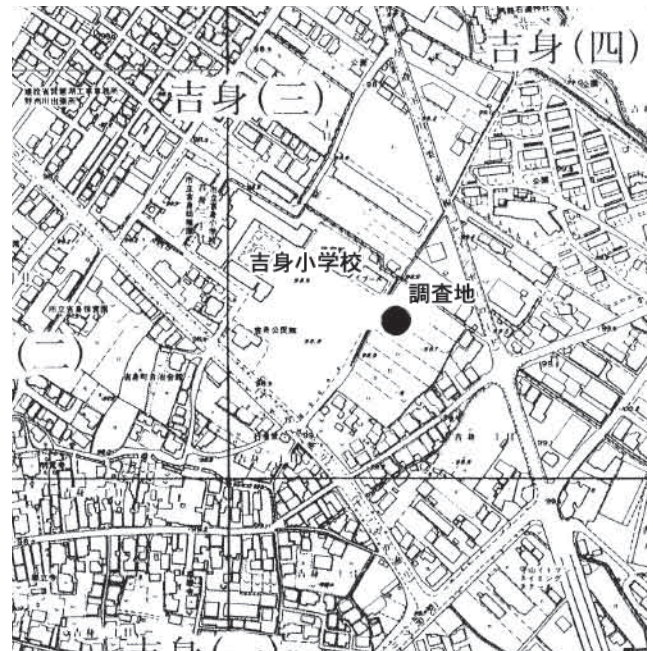


図1 調査位置図

2. 竪穴住居の概要

竪穴住居は調査区の西端で検出し、規模は東西約3m、南北約3.6mのやや歪な方形プランである。主軸の方位はN-67°-Eをとる。深さは検出面から約35cmを測り、4層からなる砂質層の埋土で覆われていた。床面はほぼ平坦で、僅かに北東側に低くなっている。この床面のほぼ真ん中には、横断するようなかたちで、幅50cm～80cm、深さ1cm～6cmを測る浅い落ち込みが走っていて、両端で少しずつ深くなっている。溝の西端の際では、直径で25cm程度の赤褐色になった部分を検出し、分析からベンガラであることがわかり、玉生産の砥ぎに使われたものと思われる。支柱穴となるようなピットは見当たらなかった。

遺物は決して多くなかったが、埋土の中間層である暗灰色粘砂層から土器や滑石の剥片が出土している。床面では土師器の甕や高杯が見られ、南端のひとつのピットには高杯の上に滑石の剥片が置かれた状態で出土している。このほか、水晶、翡翠などの剥片、また、多種類の石材を使った多数の砥石が縁辺部に近い位置で出土している。

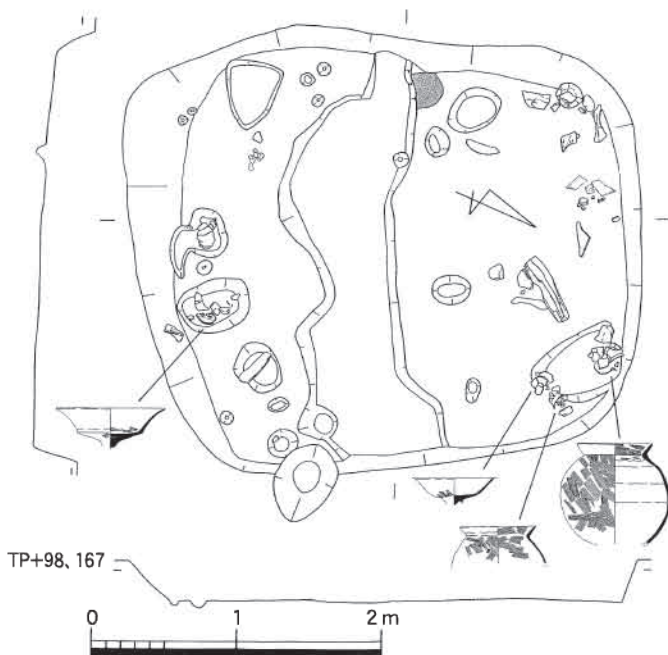


図2 SH-1(玉作り工房) 平面図・断面図



図3 玉作り関連遺物（玉素材類）

3. 出土遺物の検討

SH-1から出土した石材の多くが剥片で、製品は滑石製の白玉や有孔円板が数点出土しているのみであり、製品の素材剥片や未製品と考えられるものもわずかであった。こうした一方で砥石の多さが注目される。砥石など工具類の出土総数は16点、総重量19.1kg (19,072.3g) で、工具類を除いた石材出土総重量は2.9kg (2,935.4g) をはかる(表)。他に土器が数点出土している。以下、図下したものを中心に

詳述する。

玉作り関連遺物（図3～5）

滑石（図3-1～12、22）

白玉（1、2）は側面に荒い擦痕や、端面に穿孔時の損傷を残す。仕上げ研磨は施されていないが、ほぼ完形品である。他に白玉や有孔円板の素材剥片である板状の剥片や（10）、円形の白玉を意識して周囲に調整剥離を加えた白玉素型と考えられるもの（4）、穿孔途中品（3）、穿孔途中破損品（5、6）がある。

こうした素型以降の工程と考えられる白玉製作関係の遺物は製品が5点、破損品が5点、素型が14点、穿孔途中品が42点、穿孔途中破損品が44点確認できる。

管玉は製作途中破損品が2点(7、8)、製作途中品が1点出土している(9)。(7)は角柱状の形態のもので、側面に調整剥離痕を部分的に残す。(8)は側面に荒研磨が施され、かすかな稜を持つ隅丸角柱状の形態を呈し、穿孔を試みた痕跡を残す。(9)は側面に緻密な研磨が施され、円柱状の形態を呈し、両面穿孔途中のものである。

有孔円板は製品が1点(11)、穿孔途中品が1点出土している(12)。いずれも側面の調整は粗雑で、部分的に自然面あるいは剥離面を残すが、厚さはほぼ均一である。端面は丁寧に研磨が施され、平坦かつ滑らかである。

当地域玉作り遺跡からは双孔、単孔や、円形、楕円形、隅丸方形など、バリエーションに富んだ形態の有孔円板が出土しており、(11、12)も形態や孔の間隔などの個体差があるのも、こうした範疇の中で捉えることができる。また、一工房内でも異なる形態のものを製作していたことが確認できた。

なお(22)は今回の調査で出土した最大の滑石の剥片である。長さ5.1cm、幅4.3cm、厚さ2.9cm、重さ86.03gをはかる。

緑色凝灰岩・碧玉(図3-13、16、17)

(13)は緑色凝灰岩の素材剥片である。多面体状を呈し、非常にもろい軟質で薄緑色を呈す。管玉の素材剥片と考えられるが、Dの字状に一方がふくらみを持つ形態であることから、勾玉の背部の曲線を意識して整形された、勾玉の素材剥片の可能性も考えられる。ほかに細片で図化しえなかった剥片が数点出土しているが、いずれも同様の石材で、硬質のものは出土しなかった。

碧玉製の製品や未製品は確認できなかったが、廃棄剥片と考えられる細片の剥片(16、17)が出土していることから、なんらかの製品を製作していたことが考えられる。

翡翠(図3-14、15、18~20、23)

(14、15、18、19、23)はいずれも立方体状を呈している。棗玉の素材剥片の可能性もあるが、緑色凝灰岩同様、Dの字状に一方がふくらみを持つ形態であることから、勾玉の素材剥片の可能性も考えられる。また(15)には工具痕がみられる。

なお(20)は今回の調査で出土した最大の翡翠の剥片である。長さ7.0cm、幅3.6cm、厚さ2.9cm、重さ91.7gをはかる。

水晶(図3-21、24~26)

(24)は立方体状を呈す。丸玉、棗玉、算盤玉などの素材剥片で、調整剥離を加えた段階のものと考えられる。(25、26)は廃棄剥片である。

なお(21)は今回の調査で出土した最大の水晶の剥片である。長さ5.7cm、幅4.6cm、厚さ3.6cm、重さ111.0gをはかる。

工具類(図4・5)

砥石(持ち砥石・置き砥石)

砥石は全部で14点出土しており、2点を除いたすべてが完形である。いずれも使用痕を顕著に残す。

持ち砥石(図4-1~9、11)

長さ10.6cm~25.9cm、幅7.7cm~13.5cm、厚さ0.6cm~2.5cm、重さ129.5g~601.2gの範疇に収まり、持って使用したと考えられるものである。板状の形態を呈し、側面はゆるやかな凹凸がいくつも確認でき、側面全体で波状の形態を呈している。この凸部と凸部の間の凹面が使用により摩滅した砥面と考えられ、いずれの砥石も凹面が一側面で3~10箇所確認でき、側面が数箇所にわたって使用されたことが考えられる。また、(1、2)の上下面は平滑で、(11)は上面に筋状の痕跡を残しており、複数面を使用した砥石があることが確認できる。

これらの砥石で側面に波状の痕跡を持つものは勾玉の腹部研磨砥石と考えられ、上面に筋状の痕跡を持つもの(11)は勾玉背部の研磨や管玉、丸玉、棗玉、算盤玉などの側面研磨に使用されたと考えられる。

置き砥石(図4-10、図5-1)

置き砥石は、その大きさと重量から作業場に置いて使用したと考えられるものである。いずれも直方体状の形態を呈す。(図4-10)は上面が平滑で中央が筋状にやや窪んでいる。(図5-1)は今回の調査で出土した最大の砥石である。上下面は平滑で、横断面で見ると緩やかな弧を描くように磨り減っており、玉作り関係の砥石でなく、幅広の大形の工具類などを研ぐのに使用された可能性も考えられる。また、上面の一辺に波状を呈している部分があり(図5-1、波線矢印部分)、持ち砥石同様、勾玉の腹部研磨にも使用されたと考えられる。長さ46.6cm、幅10.5cm、厚さ11.8cm、重さ12kgをはかる。

また砥石の材質は(図4-1~7、図5-1)が結晶片岩、(図4-8~11)が砂岩で、なかでも結晶片岩は緑泥片岩や紅簾片岩など様々である。これらは片岩の層理に沿って板状に割られた剥片を使用したものと考えられる。

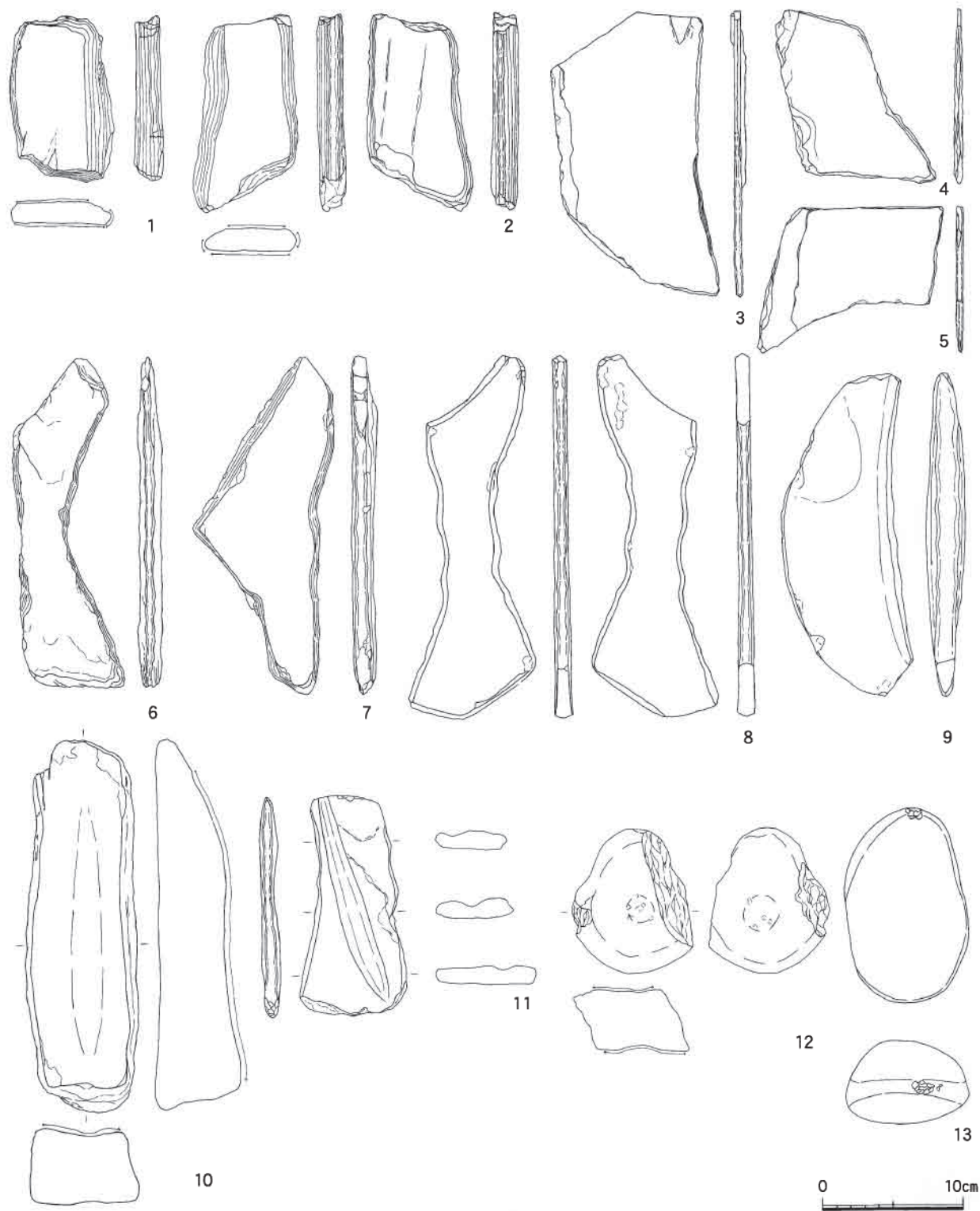


図4 玉作り関連遺物（工具類）

石材	滑石	碧玉	緑色凝灰岩	翡翠	水晶(石英)	チャート	石英斑岩	緑色岩	不明	合計
(玉素材)	908.7	13.5	23.3	169.4	246.8	583.4	176.4	152.1	661.8	2,935.4

石材	結晶片岩	砂岩	輝緑岩	翡翠	合計
(工具類)	13,340.0	3,107.3	625.0	2,000.0	19,072.3

表 石材別出土量（単位：g）

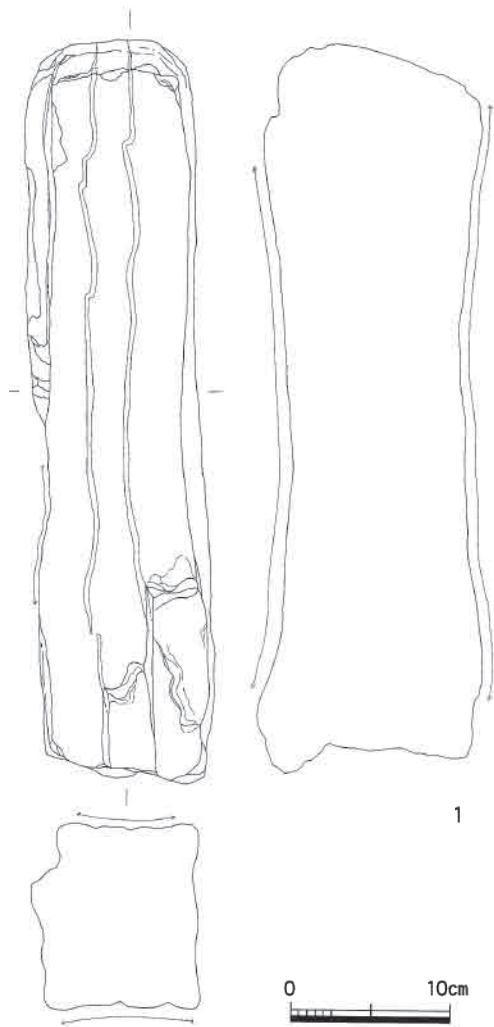


図5 玉作り関連遺物（工具類）・
SH-1（玉作り工房）出土土器

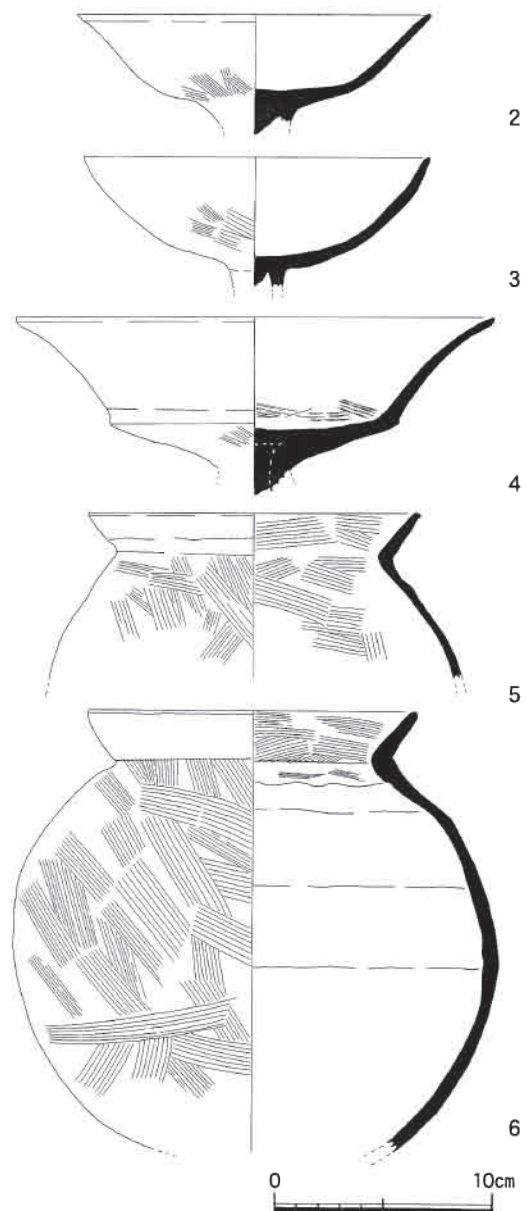
砥石の石材である、結晶片岩の剥片は18点、90.49g出土している。いずれも一点を除いて長さ1.0cm～6.5cm、幅0.4cm～3.0cm、厚さ2.0mm～7.0mm、重さ0.7g～18.8gの範疇におさまる板状の小片で、使用時に砥石の一部が剥離したものと考えられ、工房内で砥石の製作は行われていなかったと考えられる。

その他（図4-12・13）

(12) は上下中央に窪みを持ち、穿孔の際の舞錐などのプレを抑え、安定させるための上部の押さえ石の可能性が考えられる。石材は輝緑岩である。

(13) は丸みを帯びた川原石などの転石で、端面に敲打の痕跡があり敲石と考えられる。石材は翡翠である。

その他、石英斑岩が176.4g、チャートが58.34g、石材不明のものが661.8g出土している。



土器（図5-2～5）

出土した土器はすべて土師器で、そのうち図化可能なものは5点であった。(2～4) は高坏で杯部のみの残存である。全体的に摩滅が激しく、わずかに内外面にハケメ調整の痕跡を残す。(2、4) は直線的に、(3) は彎曲気味に外上方に開く。(4) は屈曲部にわずかな段を持つ。(5、6) は甕で、口縁部はやや肥厚し、内湾気味に外上方に伸びる。端部は(5) はつまみ上げて丸く納め、(6) は肥厚のまま丸く納める。口縁部外面はヨコナデ、内面にはハケメ調整の痕跡を残す。体部は球形を呈すと推測され、(5) は内外面にハケメ調整の痕跡を残し、(6) は外面にハケメ調整の痕跡を残し、内面はナデ調整と粘土紐の痕跡を残す。

いずれの形態も布留式新段階の様相を示しており、これらの土器からSH-1の存続期間は古墳時代前期末から中期前半の間にあると考えられる。

4. ま と め

出土遺物の観察からSH-1は玉類の完形品や未製品、素材剥片が少なく、廃棄剥片が多いことから、生産を中止し、製品を運び出した後の状況で出土したと推測できる。またいずれの土器にも時期差がないことから、工房として機能をしていたのは短期間であったと考えられる。

製作されたと想定される製品は周辺の集落遺跡からは出土しておらず、近隣の大塚越古墳、下味古墳などからは碧玉製管玉や、翡翠・水晶製勾玉など堂ノ北原遺跡出土石材と同石材の玉類が出土していることから、製品はこれらの墳墓の副葬品として使用され、副葬品の生産を中心に行っていた可能性が考えられる。

同時期における他地域の玉作りは、畿内地域では奈良県曾我遺跡で大規模な生産が行われるほかは、奈良県布留遺跡、大阪府垂水南遺跡などで和歌山県紀ノ川流域産と推定されている滑石を主体とし、少量の碧玉・緑色凝灰岩を用いた小規模な玉作りが点在するような状況と推測される。その他の地域では翡翠や碧玉、緑色凝灰岩を産出する北陸地域や碧玉、瑪瑙、水晶を産出する出雲地域でこれらの石材を用いた集中的な生産が行われている。

今回出土した玉作り関連遺物は、いずれも遺跡周辺ならびに近江の地層からは産出されるものでないことから、他地域から運ばれたものと考えられる。なかでも、同時期の南近江地域における玉作り遺跡ではみられない、翡翠や水晶の剥片が出土しており、そのうち翡翠は擦切施溝分割技法の痕跡を残す剥片がある(図3-15)。この技法は産出地周辺の新潟県糸魚川市笛吹田遺跡や、富山県朝日町浜山遺跡などで素材剥片の産出に用いられ、同様の痕跡を持つ剥片がこれらの遺跡で多く確認されている。

また多量に出土した勾玉腹部研磨砥石と同様の形態、材質のものが他地域の玉作り遺跡で確認でき、砂岩製のもの(図4-9)が前述の浜山遺跡で、結晶片岩製のもの(図4-1~7)が石川県片山津玉造遺跡や島根県大東高校校庭遺跡、勝負遺跡などの出雲の玉作り遺跡で出土している。

よって、堂ノ北原遺跡の玉作りは北陸地域や出雲地域と共通する石材、技法や工具といった、両地域の要素を持つものであることが考えられ、これらの調達には当遺跡の北約2kmのところにある、衣笠の立飾りなどの威儀具が出土した同時期の拠点集落である八ノ坪遺跡の首長層が便宜を図ったことも推測される。

その一方で同様の特徴を持つ畿内の玉作り遺跡に

は前述の曾我遺跡があり、ヤマト王権が主導的に北陸・出雲地域を含めた各地の玉作り工人を集結させて、多様な石材を用いた一大生産が行われたことで周知の遺跡である。そこでは工人同士の製作技法などの技術交流が行われたことが推測される。

こうしたことから堂ノ北原遺跡の玉作りは南近江地域の首長層が畿内・北陸・出雲地域との密接な交流があった上で行われたと考えられる一方で、その玉作りが単発的で小規模かつ短期間でありながら複数地域の玉作りの特徴を内包していることを考慮し、空想をたくましくするならば、曾我遺跡における玉生産に関与し、各地の玉作り技術を習得した工人の手による玉作りで、石材や工具も各地のものが集結していた曾我遺跡から調達していた可能性も考えられる。

いずれにしても現段階では推測の域であり、今後、同様の特徴を持つ資料の増加を待つて更なる検討を加えたい。

今回の報告に際する石材の鑑定にあたっては、小早川隆氏(守山北高校教頭)の多大な指導、ご教示を得た。文末ではありますが、記して心から感謝申し上げます。

(守山市教育委員会 畑本 政美・大岡由記子)

註：各遺物の重量はいずれもg単位で、小数点第2位以下を四捨五入したものである。石材、砥石の総重量はこれらの総計であるが、(図4-10、13・図5-1)のみ、一般家庭用の体重計で計測したため単位はkgであり、小数点第1位までの計測しか行えず、四捨五入などの操作を行っていない状態で総計に加えた。

参考文献

- 大場磐雄・竹内俊一他 1969
『勾玉の故郷 はまやま』
富山県教育委員会・朝日町教育委員会
土田孝雄・安藤文一他 1978
『笛吹田遺跡』
糸魚川市教育委員会
渡辺暉夫・勝部衛 1983
「布志名狐廻遺跡出土の結晶片岩製内研磨砥石」
『山陰文化研究紀要』第23号 島根大学
関川尚功 1985
「古墳時代における畿内の玉生産」
『末永先生米寿記念献呈論文集』
末永先生米寿記念会
米田克彦 1998
「出雲における古墳時代の玉生産」
『島根考古学会誌』島根考古学会